

## 1・石巻文化センターの震災被害と文化財レスキュー

佐々木 淳 石巻市教育委員会 生涯学習課

## 0. はじめに

石巻文化センター及び市内の文化財についてレスキュー側からのまとめとしての執筆は、当市の立場としては困難であるので、レスキューされる側から、当日の状況から始めて、被害の状況、レスキューについて、その後の経過、反省点などを書いてみたい。

## 1. 石巻文化センターについて

所在地は、宮城県石巻市南浜町にあり、北上川河口に位置している。

敷地面積は、11,796.28㎡、延床面積 5,979.75㎡、構造：鉄骨鉄筋コンクリート造地上2階塔屋3階建て、開館は1986年11月2日である。

博物館・美術館機能、小ホール、研修室等があり、市内の収集家であった毛利総七郎氏が収集した毛利コレクションをはじめ、総点数10万点を超える歴史・考古・民俗・美術資料が、収蔵展示されていた。石巻市民会館とともに旧石巻市の中心的な文化施設であった。

目の前に川と海があり、北側に夜間急患センター、市立病院、門脇保育所の公共施設もあり、付近は製紙工場ができてから急速に宅地化した地域でもある。西側数キロ先は、工業地帯で、製紙・住宅建材・飼料・肥料等の工場が多数立地している。

そして、南側の海との間に製紙工場の半製品のストックヤードが存在していた。これは、ビニールにくるまれた事務机ほどの大きさのブロック状の紙の半製品で、フォークリフト用のパレットに載って、大量に並べられていた。

石巻文化センターは、指定管理者制度の導入以来、博物館の学芸部門を除き、管理運営は全面的に市の外郭団体である財団法人石巻市文化スポーツ振興公社が行っていた。同財団は石巻市民会館も指定管理者として管理運営を行っていた。

また、石巻文化センターの博物館機能部分について、平成23年度から改修を行うこととし、教育委員会歴史文化資料展示施設整備対策室が文化センター内に置かれ、既に実施設計が発注済みであり、平成23年度は、6月以降休館する予定であった。

## 2. 3月11日

年度末を控え、平日の午後という時間でもあり、利用者は多くなく、ハローワークの関係者とその来場者等であった。

ただ、市民会館において翌日のコンサートの準備があり、指定管理者の職員は通常よりも少なかった。

そして、午後には会議等で、指定管理者の事務局長・次長及び市職員の室長・補佐ほか筆者も含めて計6名が外出しており、指示を出す人間が不在の状態であった。

筆者は、会議で指定管理者の事務局長・次長と本庁（石巻駅前）で会議中であった。

窓のない会議室で、会議中に初期微動を感じ、続いて、会議出席者の携帯電話から緊急地震速報のアラームが鳴りだした。

一番出入口に近い場所に座っていた筆者が、立ち上がり、出入口を確保しようとしてドアを開けた瞬間、本震が来た。

立っていることが困難なくらいの揺れがあり、ドアにしがみついて地震をやり過ごした。指定管理者の自動車に同乗して本庁に来ていたので、指定管理者の二人と、とりあえず、文化センターへ戻ろうとしたが、途中で大津波警報が出たことをラジオで知り、文化センターへ戻るのがあきらめ、筆者は本庁へ戻った。指定管理者の二人は自家用車を取りに、自宅へ戻ることとし、本庁近くの交差点で別れた。

本庁は、海から2キロ・旧北上川から1キロほど離れた石巻駅前に立地しており、津波の浸水被害はあったものの、死者が出るような水の流れ方ではなかった。ただし、排水機場が機能しなくなったため、本庁に3月13日まで閉じ込められてしまった。したがって、筆者は実際の津波の流れる様子は、生では見ていない。

以下は、同僚等から聞いた話である。

- ・ 文化センターにおいては、地震と同時に停電し、非常用発電機が作動して、必要最小限の明かりが灯るだけとなった。
- ・ ラジオ等による情報収集は行わなかった。
- ・ 防災無線は、聞こえたと言う者と、聞こえなかったと言う者がいた。
- ・ まず、利用者を帰すとともに館内を点検した。
- ・ パート職員を避難させた。（全員無事に避難。）
- ・ ハローワークの職員1名のみ、迎えが来ないと帰らずにいた。

そこへ、外出していた市職員（女性、学芸員）の内1名が戻り、大津波警報が出ており、避難の必要がある旨伝えため、市職員の女性3名（学芸員2名・事務職員1名）が自家用車で避難するため外に出た。その際に事務職員の女性が自家用車の鍵が見つからないので、戻ってきた学芸員の自家用車で避難を開始した。もう1名の学芸員は自家用車で既に出発していた。

そこへ最初の大きな津波が押し寄せた。

先に出た女性の学芸員は、津波に飲み込まれ、いまだ行方不明である。後から出た2人は、すぐに津波に気づき、近くの4階建の鉄筋のアパートに逃げ込み無事であった。

- ・文化センターに残った職員は、階段を駆け上がり、最上階のペントハウスとなっている展望室に登り、難を逃れた。（ただし、結果的には文化センターの2階へは津波は到達しなかった。）
- ・津波は一晚中押し寄せては引きを繰り返した。近隣で火災が発生し、火の粉が飛んでいた。
- ・翌朝、津波がおさまったが、文化センターの周辺は瓦礫で覆われていた。わずかに北側の駐車場だけは、瓦礫が少なく、隣接する市立病院の患者等の脱出用の臨時のヘリポートとなった。（3月13日に筆者が初めて文化センターへ行った際に、最後のヘリが飛びたつところであった。）



3月12日 中央が石巻文化センター  
その上の一部白く見える建物が市立病院（国土地理院提供）

### 3. 震災直後

火災と瓦礫により脱出が困難あったため、残された職員は、喫茶室にあったレトルト食品と飲料の自動販売機を破壊して飲み物を手に入れ数日過ごした。

3月12日から15日にかけて、それぞれが、文化センターから徒歩で脱出した。瓦礫が一面に積み重なり、元が道路であったか建物であったか、それとも空き地であったか、まったくわからなくなっており、さらに地盤沈下で水没した場所もあり、一歩ずつ足元を確かめながら進むしかない状態であった。

歴史文化資料展示施設整備対策室の職員は、さしあたり市立女子高等学校の避難所へ集合し、自宅が居住不能となった職員は、避難所運営要員も兼ねて、この避難所へ寝泊まりし、4月上旬まで、執務場所とした。

また、筆者等は、3月17日まで本庁管轄の避難所等の物資搬入等に当たった。

仮の執務場所として図書館の館長室を借り、4月4日に移動した。

文化センターについては、3月14日まで職員が寝泊まりしていた。

その後、自動車で、文化センターまで行けるようになったため、18日に開口部へトラロープを張った。（悪意を持った人には無力であるが、この時点でできる最大限であった）

以後、ロビーに展示してあった資料を収蔵庫へ格納するなどし、文化財レスキューの開始を待った。

### 4. 石巻文化センターの被害

津波は、東側の旧北上川と南側の石巻湾から押し寄せているが、石巻湾側は障害物があり、強い波は川から来ている。

外側の扉・ガラスが破れ、館内に津波が流れ込み、最大の高さは床面から3メートルを超えている。館内の扉もほぼすべてが破れ、各部屋に海水が流れ込んだ。

その結果、1階は第1収蔵庫を除き、壊滅的な被害を受けた。ロビーには白い軽自動車流れ着き、製紙工場のストックヤードから大量の半製品が流れ込んで、紙の繊維があちこちにこびりついていた。

博物館機能部分の収蔵庫と調査研究のための施設は取り返しのつかない被害を受けた。唯一、前年に寄贈された重要文化財を含む毛利コレクションの主要な部分が収められていた第1



ロビーに流れ着いた軽自動車



第一収蔵庫前（奥の丸い取っ手の付いた扉が改修していた扉）

収蔵庫だけは、扉を頑丈なものに取り換えていたため、床上2センチ程度の浸水で済んだ。この部分だけでも、被災を免れたことは幸いであった。ただし、扉の前には瓦礫が積み上がり、また、出入り用のシャッターが曲がって上がらなくなっていたので、シャッターを切断したり瓦礫を撤去したりしてからやっと扉を開けられるようになり、実際に中の状態を確認できたのは、4月27日であった。

第2収蔵庫(美術資料)は、外開きの扉が内部に倒伏していた。そのため、収蔵庫前等にあった梱包資材やストックヤードの紙製品などが流れ込んでいた。吹き溜まりならぬ流れ溜まりのような状態になったため、流出した資料はほとんどなかった。

隣接する考古収蔵庫もほぼ同じ状態であった。

しかし、車庫であったところを民俗資料収蔵庫に改修したと



第2収蔵庫(いろいろなものが流れ込んでいる)

ころは、外壁が破れ、相当数の民俗資料が流出した。この外壁が破れたところは駐車場のアスファルトもはがれていたことから、この付近で津波が渦を巻く等、寄せては引く以外の何らかの大きな力が加わったものと推定される。なお、この外壁は通常の鉄筋コンクリートではなく、鉄筋の入ったコンクリート製のパネルを骨組みにはったものであった。したがって、この部分の壁も改修する際に鉄筋コンクリートにしておけば、流出を防げた可能性がある。

資料整理室は、窓が1か所破れ、大量の海水が流入し、こ

れまでの調査データはすべて水没した。インターネット環境がなく、スタンドアロンでLANを組んでデータベースを作成していたが、デジタルデータは一部のCD-Rを除き、ほぼすべてを失った。ただし、紙に打ち出ししていたものは、流出を免れたため、奈良国立文化財研究所で真空凍結乾燥を行ってもらったこととなった。また、写真やフィルム類も海水に浸かり、乳剤面が溶け出したものも多いが、可能な限り洗浄し、救出に努めている。

津波前の状態を知っている筆者から見た1階の津波被害についての簡単な所見として、ガラス等の開口部は、ロビー等の全面ガラスになっているところは非常に脆弱で、石巻文化センターの場合は海側だったこともあり、ほぼ全面のガラスが破損した。一方窓ガラスは、一部しか破れなかった部屋とほとんどが破れた部屋があったが、その原因は不明である。石巻文化センターの窓ガラスには紫外線防止フィルムが貼ってあり、通常のガラスよりも破れにくくなっているが、一番南東側の研修室(一番海や川に近い方)の窓は、ほぼ全部破れ、内部にあったテーブルと椅子が流出した。それに隣接する喫茶室の窓はほとんど



第一研修室（幕板付の長テーブルが口の字状に並べてあったが、すべて流出した）

破れておらず、わずかな偶然が左右するものとも考えられる。

資料整理室の窓ガラスが1枚だけ破れたのは、自動車や丸太等の硬いものがぶつかったのではないかと推定している。石巻港は合板工場もあり、大量の丸太がストックされており、それが津波で流出し各所に被害を出している。

2階以上は、地震の被害が若干あったが、大きな被害はなかった。

展示室は、照明の落下（ただし、床面まで落下したものはなし。番線で止めていたため）、展示資料の落下（縄文土器2点、うち破損1点）、転倒2点であった。縄文土器等はテグスで軽く固定していた。テグスでの固定は、非常に有効であり、落下した土器はテグスが切れたものである。これもやや太いテグスで固定していれば防げたと思われる。

収蔵庫は、紙類を積み上げていた固定棚の一部が倒れ掛かっ

ただけでほぼ無傷であった。この固定棚も上部を鉄のアンクルで相互に接続し転倒防止を図っていたため、完全な倒伏は免れた。

美術資料の展示において免震台を導入しており、この免震台に展示していた等身大の木彫は転倒を免れた。同じ作家の木彫で同程度の安定感の木彫で倒れたものが1点あったことから、免震台は有効であったと推定される。

総じて石巻文化センターは、耐震対策は積極的に行っており、今回の地震の揺れに対しては相当程度効果を上げることができたと思われる。

## 5. 文化財レスキューの受け入れ

3月下旬以降徐々に通信事情が改善し、各所と連絡がとれるようになり、宮城県を通じて文化財レスキューが始まることを知り、受け入れることになった。4月上旬には全国美術館会議から連絡があり、こちらにも救援を要請した。

石巻文化センターにおけるレスキューは、4月20日から始まり、あらかたは7月中に搬出が終わった。その後、被災しなかった資料及び搬出が困難であった資料の運び出しが追加で行われ、最後の搬出は12月となった。

## 6. 反省

### 6-1 防災体制の反省点

- ・ 指示を出す立場の人間が全員外出していた
- ・ ラジオを事務室に常備していなかった
- ・ 津波をやり過ごした後、孤立することを想定していなかった（食料品等の備蓄がまったくなかった）
- ・ 調査データを1か所で保管していたので、紙類も水損させてしまった。
- ・ 調査用のPCもすべて水損したため、データの復元ができなかった。バックアップを工夫する必要がある。（PCの故障に備えたバックアップは行っていたが、ディスク類をすべて同じ部屋で保管していた）
- ・ 津波対策を想定した収蔵施設になっていなかった（すべての扉を改修すべきであった）
- ・ 職員の防災意識が低かった（ラジオが近くになれば、自動車を持ってきてカーラジオを聞く等の情報収集を思いつかなかった）
- ・ 第1収蔵庫及び考古収蔵庫、民俗収蔵庫の資料は、収蔵庫の改修のため、一時的に移動していた資料を、仮に戻した状態で震災にあった（パート職員が主となって戻した、4月以降に民俗担当の職員を異動させ、再整理する予定であった）

### 6-2 文化財レスキューを受け入れるにあたっての反省点

- ・ 最初からレスキュー側には伝えて了承はもらっていたことではあるが、職員数が少なく、復旧・復興のための資料作りなどの事務作業もあり、さらに職員自体も被災した者が多く、十分な対応ができなかった（学芸員が6名いたが、1名行方不明、1名避難所運営へ出向。行方不明の職員は考古資料が頭に入っており、避難所運営に出向した職員は、唯一の歴史資料担当であった）そのため、本来であればレスキューの現場に、職員がつかなければならないのであるが、お任せせざるを得ない場合も多かった。
- ・ 総じてレスキューを受け入れる側としては、人員・機材等をすべて用意していただき、全国からの支援をもって進められた事業であり、大きな不満はなかった。

## 7. 現在の石巻文化センター

震災から1年となり、石巻文化センターの現状についてここで記しておきたい。

外部からの侵入防止に、鉄板とベニヤ板で仮囲いを行っている。

また、1階は、ボランティアにより、泥や瓦礫を相当程度撤去してある。

しかし、空調機器などがあった機械室は手つかずのまま放置しており、危険があるため、一部の泥や瓦礫は撤去していない。そのため、1階は、震災後1年を過ぎても常に湿った状態であり、ビニタイルの床は何となく湿っぽい感じがする。さらに水損した天井は、海水を吸って脆くなり、一部が、今になって落下し始めており、1階に入るときはヘルメット（安全帽）が欠かせない状態である。仮囲いはしてあるものの、鳥は出入りが可能であり、そのため、ロビーや扉が破れた部屋などは、鳥害の危険がある。

なお、石巻文化センターの博物館機能は、同様に津波の直撃を受け使用不能となっている大ホールを備えた市民会館とあわせて、複合文化施設として整備する計画となっている。

本来は、それぞれ別の施設として整備すべきである。しかし、復興後の財政負担を考えれば、ランニングコストが圧縮できる（事務職員・警備員等が節約できる）複合文化施設として整備せざるを得ない。

## 8. おわりに

石巻文化センターは、河口部に位置し、今回の震災では大きな被害を受けた、しかし、文化財レスキューのおかげで、流出を免れた資料の保存が行われた。

---

しかし、未だ石巻市は復興の緒についたばかりであり、文化財レスキューで運び出した資料を今後どのように保管していくかも方向性は出ているものの、具体的な部分は未定であるなど、まだまだご協力をいただく場面が多くあると思いますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

また、本稿は石巻文化センターのみについて書いたが、ほかにも牡鹿文化財倉庫・おしかホエールランド・雄勝硯伝統産業会館それに民間所蔵資料などについてもレスキューの手が差し伸べられ、市民の財産でもあるこうした文化財を守ることができたのは、ひとえに文化庁を中心とする官民を挙げてのレスキューのおかげであり、心から感謝申し上げます。